

武家名目抄稿

衣服部附録四

四

西 五 六	一 一 架	七 七 函	二 五 二 〇 大 號	和 書 門 類
-------------	-------------	-------------	----------------------------	------------------

庫 文 閣 内	一 五 二 函	四 五 六 冊	二 五 二 〇 六 號	和 書 類
------------------	------------------	------------------	----------------------------	-------------

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (197)
函號	153   275





武家名目抄稿第四冊

衣服部附録四目錄

袷

白袷

淺黄

唐茶

柳色

玉虫色



とかけ色

こき崩黄

萌黄

織色裕

紫の裕

おじ色

生練貫

六人

空色

茶

あゝらの裕

紅梅

ぬき白

朽葉

おじ

赤き裕

牡丹袴

ぬめの紅梅袴

大身、わり

片身替の袴

練貫の袴

丸生しの事

生裏

罩物

大帷子

帷子

白帷

梅染

浅黄帷

紺地白帷

菖蒲帷

赤キ帷

唐布帷

紅ノ入たる

崩黄帷

生絹

辻々花をく

せすり

あふら布

サラシ白帷

越後布帷

一重生

北絹帷

帯の事

上帯

有方巡方帯

赤き帯

くく物

かうー

織物の帯

はくの帯

ぬきーろち

ちろち

足袋

短鼻

頬貫

又ツナヌ  
キト云

豹ノ皮ノ貫

水豹ノ貫

獺ノ皮ノ貫

熊ノ皮ノ貫

羚羊ノ貫

牛皮ノ貫



駿府記云慶長十九年甲寅四月四日加藤  
肥後守忠廣御礼献銀二百枚御服十領御  
袷衣廿領

白き袷

貞順豹文書云略次二年よりありんあ

さきちや又白あ。り。せ。紫。お。無。し。可。然

い

古供古実云袷の事。た。き。ぬ。了。然。い。略。中。き。ぬ

のもた。白くあ。は。た。と。可。然。と。し。習

い。ち。り

条。聞。書。云。又。白。絹。の。袷。奉。り。但。公。方。板

め。さ。れ。い。る。料。敵。有。る。し。と。も。し。い

万。按。書。条。云。袷。色。白。布。也。老。者。と。可

然。い

浅黄

貞順豹文書云次二年よりありんあ。い



きちや又白あり世紫ありとて  
吳本条、聞書云又年家はたむあさき茶  
こきとてきれとよくい  
大名仕記云年家には先あさきちや  
んとてきくら梅世教ありとい  
万按書條云又淺黄唐茶紺こき萌黄  
もつ然い

唐茶

万按書條云又あさき唐茶紺こき萌黄

柳色

貞順豹文書云先あさき人よはくちは柳色  
紫了然い紅  
馬見糸入記云袴此事夏の袴は柳色白  
袴也

異本条、聞書云さうありむらさきはめ  
いさしんくち紫い柳色袴

ぬき、室色をくきあとなる

大名出仕記云又若き人は朽葉を己柳

色あとり然い

故實雜聞書云あをせの事何色然い哉

中若人はひくち紫柳也又人のこの

みよりまひくちい

玉虫色

貞順豹文書云又人のこのまゆをひく

た色玉むし色き糸りぬきとけ色あ

をも着い

大名出仕記云又ひくち色玉虫色もや色

空つらとけ色世等云十年の人の

きい

とかけ色

貞順豹文書云又人のぬきふををひく

と色玉むし色き糸りぬきとけ色あ

とともやうい

好実糸、聞書云又人の赤北をふくく  
ひきこもとうけ色も用い

こき、萌黄

若按書糸云又あさき、唐糸紺こきも  
きもつぬい

萌黄

若本糸、聞書云くあをひと柳色きゆり

ぬき字色もつきあもたるつ

織色衿

貞順豹文書云かり色のあせぬきんせひ  
のるもこれ依るあり袖あとをあり

若用い

古供古實云衿の事只きぬてぬいを身か  
り色の程あり中志ありて免し方  
いあり色の衿むり、は替割きてい

る者ばかりいふれ。仕組と申すは、  
りをうり志ありいと着用の事不可  
然し  
奈、聞書に四月朔より終をきい織色  
のありせあり。バありと袖とを志不  
る。――  
万按書奈、多程色白布也。中織色。禁制禮  
をうり志ありき不

紫の給

貞順豹文書にあらせの事何事も不若い  
欲但む。うさき色をは。料取也

万按書奈、云紫と不若い。

奈、奈、聞書に、<sup>上</sup>さう、あう、む、さ、記を

め、い、ま、い、

東遷基業云神君大將軍と相議し、  
家<sup>武</sup>の法令十二条を定給ひ、貞永建武の式

目子准せらる色七月七日徳大名を依見城  
舎をいめらる布多上野命正純これに  
論告なり中一衣裳之品不可混雜事君臣  
上下可為各別白綾白小袖紫袴紫裏練無  
紋小袖無免許筆不可濫著近世陪從諸卒  
月飾借用綾羅錦繡甚非古例焉

色

貞順豹文書云又人の好まより玉

いろ玉むいろ

大名出仕記云又まき人の中又ひ  
いろ玉むいろ

有実雜々開書多ある世此等中又人  
のこのこみよりひいろいろいろ

生練貫

貞順豹文書云又人のちのみふよりいろ  
くも玉むいろきいろぬきいろ色

あし着し

吳本條、聞書云くは松比己柳色き梅り  
ぬき空色とんきたふとたる

あん

貞順約文書云次、年はあん、あさき、あや又

白

万按書條云又成黄唐茶紺、こきと(き  
も可然し

空色

吳本條、聞書云くは松比己柳色き梅り  
ぬき空色とんきたふとたる

大名出仕記云又ひき、色玉虫色りや色  
空色とくけ色

茶

貞順約文書云次、年よりあはらんあは  
き、あや又白

大名歩仕記云年寄うは先あきぢぢ  
んもき

志らひの程

貞順翁文書云又志らひのあきせうけいゆを  
志らひのいぢも其まゝ用ひ

紅梅

万按書云紅梅男は十五迄着か能景回  
あはせいより不若十五もせいより

無用の女房は廿八の五月廿午の時  
まへに五小帯と案目鞠より五之明  
年五月五のまへに如に返さるゝめ  
分也

ぬき白

在実録の聞書にぬき白もきり斗  
用也

大名出仕記云又ぬき白のうもあは

朽葉

貞順豹文書云先美き人ありて紫柳

色紫可然也

吳中條々聞書云云。初は柳色き禊り

ぬき定色らつきあると云ふ

大名古仕記云又美き人ありて紫柳

色あると可然也

石実難く聞書云美き人はひは柳紫也か

き色又人の好ぶなり

云云

異本条々聞書云云。紫初は柳色き禊

りぬき

大名古仕記云又美き人ありて紫柳

牡丹の禊

条々聞書云云。四月一ヶ月をり

きりては着い事なり



ぬめの紅梅裾

糸、聞書云又ぬめの紅梅を内裏御前  
に伺ふの女中と云ふ輩廿一の年月廿六日の  
時きて良連いゆ法云い胃と十五連あり  
を忘るり云きい

大身、わり

捲川記云又大身、わりありあともよそめ大  
名の内の名をとりて、いふと連と一向列る

にていあり

西供古実云丸云、の事又、大身、  
わり、小保、を大名の、人、り、  
い、は、お、さ、て、り、い、熱、利、無、意、の、り、  
り、い、い

片身替の裾

貞順約文書云、身、わり、の、あ、ら、せ、の  
り、是、も、十、四、五、あり、の、り、云、い



有実教の聞書云丸す。小ハ。う。く。付。ハ。是  
も位よりてきハ。男は幼少ハ。る。後人きハ  
女房流ハ。一。ハ。る。勿。偏也。是。も。ハ。仁。神  
系。按。書。余。ハ。云。丸。云。一。上。福。ハ。上。福。ハ。云。凡。ハ  
中。福。ハ。不。凡。ハ

生裏

貞順豹文書云生裏ハ。る。是。も。女。房。流。云。斗  
き。ら。れ。ハ。男。は。不。着。ハ

單物

鎌倉年中行事云同日朝如朔日公方様  
御單物福地御紋桐

大帷子

滿濟准后記云正長二年三月廿三日今日  
室町殿御参内始并御院泰云一管領後騎  
五番十騎各直至小侍所三番六騎侍所三番六騎也  
主従同直無大帷之

貞順豹文書云大<sup>ろ</sup>く<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>時<sup>ろ</sup>白<sup>ろ</sup>き<sup>ろ</sup>袖<sup>ろ</sup>  
も不<sup>ろ</sup>苦<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>只<sup>ろ</sup>此<sup>ろ</sup>時<sup>ろ</sup>を<sup>ろ</sup>いつ<sup>ろ</sup>連<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>袖<sup>ろ</sup>も<sup>ろ</sup>着<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>但<sup>ろ</sup>  
かり<sup>ろ</sup>お<sup>ろ</sup>あ<sup>ろ</sup>と<sup>ろ</sup>を<sup>ろ</sup>は<sup>ろ</sup>め<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>申<sup>ろ</sup>く<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>  
布<sup>ろ</sup>衣<sup>ろ</sup>化<sup>ろ</sup>云<sup>ろ</sup>袖<sup>ろ</sup>一<sup>ろ</sup>重<sup>ろ</sup>事<sup>ろ</sup>好<sup>ろ</sup>絹<sup>ろ</sup>を<sup>ろ</sup>う<sup>ろ</sup>ら<sup>ろ</sup>ん<sup>ろ</sup>條<sup>ろ</sup>二<sup>ろ</sup>色<sup>ろ</sup>  
大<sup>ろ</sup>を<sup>ろ</sup>付<sup>ろ</sup>粘<sup>ろ</sup>衣<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>袖<sup>ろ</sup>一<sup>ろ</sup>寸<sup>ろ</sup>を<sup>ろ</sup>う<sup>ろ</sup>ら<sup>ろ</sup>ん<sup>ろ</sup>お<sup>ろ</sup>念<sup>ろ</sup>き<sup>ろ</sup>也<sup>ろ</sup>衣<sup>ろ</sup>  
と<sup>ろ</sup>大<sup>ろ</sup>帷<sup>ろ</sup>る<sup>ろ</sup>に<sup>ろ</sup>可<sup>ろ</sup>付<sup>ろ</sup>也<sup>ろ</sup>

帷子

蜷川記云同くく<sup>ろ</sup>ら<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>事<sup>ろ</sup>何<sup>ろ</sup>を<sup>ろ</sup>不<sup>ろ</sup>苦<sup>ろ</sup>

西<sup>ろ</sup>供<sup>ろ</sup>古<sup>ろ</sup>実<sup>ろ</sup>云<sup>ろ</sup>か<sup>ろ</sup>く<sup>ろ</sup>ら<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>事<sup>ろ</sup>何<sup>ろ</sup>を<sup>ろ</sup>不<sup>ろ</sup>苦<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>  
も<sup>ろ</sup>不<sup>ろ</sup>苦<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>

大名<sup>ろ</sup>出<sup>ろ</sup>仕<sup>ろ</sup>云<sup>ろ</sup>帷<sup>ろ</sup>云<sup>ろ</sup>事<sup>ろ</sup>何<sup>ろ</sup>も<sup>ろ</sup>不<sup>ろ</sup>苦<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>

奉<sup>ろ</sup>之<sup>ろ</sup>覚<sup>ろ</sup>悟<sup>ろ</sup>記<sup>ろ</sup>云<sup>ろ</sup>女<sup>ろ</sup>中<sup>ろ</sup>流<sup>ろ</sup>は<sup>ろ</sup>五<sup>ろ</sup>月<sup>ろ</sup>五<sup>ろ</sup>日<sup>ろ</sup>も<sup>ろ</sup>禊<sup>ろ</sup>り

出<sup>ろ</sup>き<sup>ろ</sup>を<sup>ろ</sup>被<sup>ろ</sup>着<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>云<sup>ろ</sup>一<sup>ろ</sup>ま<sup>ろ</sup>き<sup>ろ</sup>世<sup>ろ</sup>時<sup>ろ</sup>云<sup>ろ</sup>一<sup>ろ</sup>す<sup>ろ</sup>く<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>

く<sup>ろ</sup>ら<sup>ろ</sup>なり<sup>ろ</sup>若<sup>ろ</sup>心<sup>ろ</sup>女<sup>ろ</sup>中<sup>ろ</sup>流<sup>ろ</sup>は<sup>ろ</sup>五<sup>ろ</sup>月<sup>ろ</sup>一<sup>ろ</sup>日<sup>ろ</sup>より<sup>ろ</sup>七

月<sup>ろ</sup>中<sup>ろ</sup>か<sup>ろ</sup>く<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>也<sup>ろ</sup>八<sup>ろ</sup>月<sup>ろ</sup>一<sup>ろ</sup>日<sup>ろ</sup>より<sup>ろ</sup>禊<sup>ろ</sup>り<sup>ろ</sup>ぬ<sup>ろ</sup>き<sup>ろ</sup>を

ぬ<sup>ろ</sup>着<sup>ろ</sup>い<sup>ろ</sup>

會津四家令考出羽國畑屋城落條云大将  
五兵衛尉ハ兼テ期タル事ナレハ些トモ  
驚氣色モナリ鎧一編シテ其上ニ修多羅  
ヲ書タル帷子ヲ着テ文字ノ手鑑ヲ提テ  
込入敵ノ正中ハ面モ不振突テ掛ル

白帷子

山槐記云治承四年三月四日丙辰今夜新  
院遜位之後始有御幸土御門亭略次移馬

舍人四人

ニ藍裏茵木上下敷冬  
衣白帷平礼不取松明

敦盛草紙云源氏乃不承トト中臣我子  
我子紀ヲとろウイセをヤメ有申ケとも  
東國北岸ん一小あをん一つ魚なる魚一けを  
一一方長及申物一一一ふ一く一な一く一世  
方き一よ一き一ふ一及一と一時一ま一あ一り一ふ一き一子一子  
た一と一ハ一異一國一北一岸一ん一と一い一ら一接一く一此一つ一  
り一も一あ一れ一た一と一の一船一行一な一ふ一と一の一事一の

あゝ急ぎきりて平下河原ゆきむら河と生  
く海いせとありーとき平河左馬頭とそ  
んてまにみあひまくとまづつひつんと屋の  
う北うあつはつと入くつてふその日乃志  
やくそくいをおやりまそそふつとけまは  
たよいあろきくうあらみをおろおと引ち  
りつかろんの程あつれめあめらりをゆ  
りくさとよせ梅やうち梅いたう桃李里北さうの川

初やくたんみうきれを初あてに志ふあ  
んのあいたんーいとむわとれ屋のまは時  
とかう屋くまうとと河く初河うてらさうす  
里あうまさつくと着るい。  
吾我お修多兄弟十市うそのとれあ  
あうはあらにうと初うのうきふくかき  
たるふむうああひひうれの

宗吾一冊抜書云男北夏の左れ八百きか

ひらあり

糸、聞書之年たけく。胃不可知は若も  
老くも白帷子似合い

大名出仕の記之年分は白帷先下感い  
西供古実の白く。心く。地白あり  
き人下感い

梅染

捲川記の若人下はく。地白又梅をく

あとり然いあり

西供古実の梅を。あき。あとり。深くは

不著い

糸、支書其外は梅を。あとり。終い

吳本糸、支書其外は梅を。あとり。終い

くい

あき帷

西供古実のく。心く。の事尋く。い

何も不苦い物ある。さあとも染く。は不

苦い

紺地白帷

以供古実を白く、さらさら。地白なとわ

き人下着い

大名出仕に記す。各人等紺地白の。い

らよくい紺地白とは皆人の。い地白の帷

子の事。い

驥駒嘶餘云帷之事端午ニ菖蒲帷トテサ

ラシノ布ヲ紺地白ニ染テ五月中着スル

也

菖蒲帷

驥驢嘶餘云帷之事端午ニ菖蒲帷トテサ

ラシノ布ヲ紺地白ニ染テ五月中着スル

也

赤き帷



卷川記云云。きりく。あとは見よ。元は

下紙ハ

是布條と史書云云。あこ。元元は。あ。り。

可紙ハ

唐布帷

大名出仕之記云帷之事。何も石甚ハ唐布。

あといきんせいのはき。あ。く。

條と聞書云。か。あ。ら。の。事。中。但。う。布。の。

数は僧唱食るとはあをよ。く。

万極書条云帷。つ。も。あ。甚。ハ。唐。布。也。史。

割不皮。あ。

紅の入り。

可供古案云。又。あ。君。あ。とは。紅。の。入。り。も。

り。用。り。く。る。か。を。

萌黄帷

是布條と聞書云。り。あ。ら。の。事。あ。り。

しつしつと云々梅とつきあはぬ女房元  
思着危るとはよくい

辻の花

をく

宗吾一冊抜書云つしつと云々の事妙房元  
思あとのと着け胃もきけりん飲十二云ま  
ては胃も成人のあたらひおする  
糸の聞書云かえぬの事律りちおはく

あとは女房思ふ元と云うは年たけ  
多白胃不可抱い

其本糸の聞書云云初らぬ事つしつと云  
むく梅とつきあはぬ女房元思ふ元と  
と云くは年たけつしつは不可抱い

世すり

あふら布

條の聞書云其外は梅葉と云々世すり

あふら布あといあ  
あふら布あといあ

前

さらし白帷子

駿野嘶餘云自七夕至八月晦日廿九日

白帷ヲ着ス

越後布帷

駿野嘶餘云自六月朔日越後帷至七月六

日着スル也

一重生

大名出仕之記云一重生とは生絹の帷之

事あり紋を付くもありと又一方をば

赤又下りのをは白く仕込先をは白赤

とと

以供古実云一重生の事これと一修賞

既之事と



上帯

平家物語云 重衡 之位中將は馬は弱る海

一 綱と弁入らぬ帯れはそつゝも遠慮を

決むるきぬもあつり帯はは心持記るよ

里飛くりり上帯きりきりひもをり

既小股をゆらんや

有文巡方帯

道隆院右府懐柔抄云有文巡方帯 或曰文

文のる鬼形獅子形唐花唐草也真

実の玉帯は丸も石焼とつゝ里元懐柔

の具足の中ふ鈕笏帯は名物とも有と元

一 とうり將軍家拜賀此鈕倒多建武元年十

一月十九日等持院將軍参議拜賀亦有文

巡方用らる康暦元年七月廿五日唐花院

准后大将拜賀有文巡方用らる長祿三年

十二月十九日慈照院准后左大臣拜賀亦此帯

を用ら進一也

赤き帯

うらお

か

大名出仕之記云帯此より多入古色のを

仕するに能ひ又年暮は紅入るるに

うらしと能ひ

織物の帯

故実雜々聞書云織物の帯も

て

はりの帯

梅津長者繪詞云かくと方お多たをせ

けるは若帛和為のあをさまをえりやふ

あゝあひあゝとなくほりて定めて地うら

強かゝん相撲一まんまのうんのさやとを

め強くは和為のうらととうる候ひよくたの

—この時をきかはすまの鳥よあまを—  
さらはあひておまいむと衣とけしを  
めきすく帯の中うはるう帯とらあ—  
手繩をつき引—ゆるき出てたまふ  
省さるはふり—きそんか又帯る  
ぬき—ろを—  
赤を—

貞順豹文書云ぬきるの—の—の—男十四

五才てお着け如中はどのきる斗—を用い  
又云忘きた—をば依人<sup>ま</sup>軍斗—きるも  
きけ如中<sup>れ</sup>る用儀ハ各別—くは委注至  
也

足袋

豊記抄云足袋の事大名諸宗の人<sup>左</sup>うり  
い不可<sup>れ</sup>靴ハ病者ハ不及是靴ハ色—條革不  
用い<sup>ま</sup>きふすつあ<sup>と</sup>靴ハ<sup>れ</sup>宗の儀も主人

ゆるすれいとは不苦い

案々聞書々定袋の事殿中へは有免い  
てハ元在起いりけい免の時ハ必中定袋一  
定々下い又入道同朋流は有免のきく左  
く在きい人の因流も主人の有免いとは元  
可れいいすま無文のうに好ま〜華をは  
不可用候但出陳の時と有去〜う〜る

〜

續淳祝或同々定袋有免の事明應三年十  
二月廿一日將軍家元服記云正和二年三月  
廿七日新制定袋有免事華祿年齢五旬  
以後可被免件但終不及此齡為病終家  
中免可用白華燵華矣

短鼻

卧雲日伴録云 文安六年三月十日下  
同喫粥辞去為之出短鼻一足相惠  
——興定水菴主



頼貫

又ツナヌ  
キト云

奥州後三年饗詞多相換乃國の住人鎌倉の  
権五郎景正といふ者あり其北自代村さし世  
川首を村つらぬきいかめとの縁付此板ふ  
村付らぬ矢をおまうけて昔の矢を村て  
款を村とりつさし乃ちありそき田りて子  
とをぬきて景正を負きりてあけやふは  
かぬ回國の傳ともの云傳

いふものありこゑもあえり。、者あり  
はらぬきをたふあう景正の顔ふま  
て矢をぬきとす

古事談云伊豫入道頼美於、堂修逆修之  
間或日美家聽聞之中間即等一人出來美  
家力耳ニサ、ヤ侍事ス聞之有忿怒之色  
飯向宿所爰入道呼郎等一人云左衛門尉  
有怒氣飯畢何事ノアルヲ見可飯來云々



らゆめ皮すくもへるう祿をや履尾

普廣院殿御元服記云永享二年七月廿九

日大将御拜賀供奉行列出仕人々伺候次

第花蹲踞所帶甲冑于時志松左京大夫

第伊豫守至即從三十騎召具之義雅者着

雅勤其役浅黄系鎧帶金刀金太刀握重藤弓負大中

黑箭甲床木等ハ僕持之馬前二行歩馬

毛黒隨兵皆着糸毛鎧甲敷皮等ハ僕持

之皆総ヲカリ僕ハ紺ノ直垂ニ銀薄ニテ

文ヲ押ス皆調度懸手蓋ツナスキ任先規

カ騎馬ハ常ノ篋手歟

隨兵日記云俣カぬキの毛一尺二寸カ

毛ニ此廣サ四寸二分是此なるうのゆひまけ

緒をすく同はぬキの皮とらぬ皮あ

さらハ此皮然此皮を用つこしらつやう

糸：口傳あり

豹ノ皮ノ貫

長享元年江州御勤坐記云常徳院殿攝御  
勤坐之御出立事中豹皮之御連貫二御馬

八河原毛也

水豹ノ貫

相國寺供養記云次後陣隨兵一番治部大

輔義重黑糸鎧白覆地紅直垂唐織物紋相

馬黑鞞内金々具足上帶貫水豹

獺独ノ貫

相國寺供養記云路次行列先陣隨兵六番

土佐守高階師英一一黑糸白金物紅ノ直

垂文輪違馬栗毛土帶引貫獺独刀太刀梅

花皮金具足

熊ノ皮ノ貫

判皮物語云長經吉野山并其文片外とと小書云

ア、ウ、ク、チ、中、此、さ、う、と、う、を、又、さ、ま、い、り  
い、し、ん、と、し、も、を、し、は、西、ま、し、を、し、つ、ら、ら、あ、ま  
そ、を、き、あ、し、う、ち、の、た、た、と、く、お、そ、り  
う、ち、あ、き、あ、つ、つ、ま、つ、き、く、は、め、い、北、つ  
ら、ぬ、き、ま、い、く、此、日、あ、り、う、ち、を、時、め、ら、う  
く、と、め、ち、も、や、う、さ、け、ち、う、し、ま、し、け、ち、さ  
し、て、下、り、ま、り、

相國寺~~供~~粮記云路次行列先侍所富山右

衛門佐~~添~~基國黒糸鑑薄香直垂、鶴菱太  
刀懸紋金赤銅相交引西丸馬鹿毛貫熊皮

羚羊ノ貫

相國寺供養記云次後陣隨兵二番一色右

馬頭源滿範黒<sup>糸</sup>白覆輪紅直垂<sup>桐紋</sup>刀太刀

金作馬佐目鞍黄覆輪金具足上帯引貫<sup>羚</sup>

羊

牛ノ皮ノ貫

源平盛衰記云參經院大將軍義經ハ熊皮  
貫テ履自余ハ牛皮ヲ履ク云々

武家名目抄稿第四冊

明治十六年三月日旧稿校正 小野由久

同年同月廿八日再校正 荒書 青山景通

同年四月五日夜以旧稿一校加朱了

全十八年四月 校合 深澤政長



Faint vertical text on the right side of the page, likely bleed-through from the reverse side.

全十八卷四頁 林合 孤影 越身

同美山五。蘇山如游一計也

同美山月廿八日再林五書去有山景

武家照子不測度也 小櫻山又

